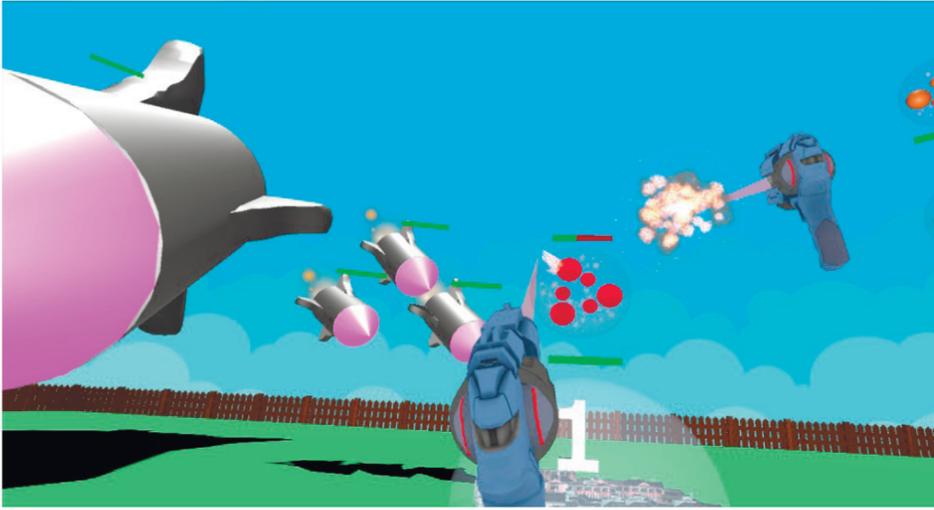


サークル企画



▲ヘッドセットをしたVRゲーム

この頃、VRという言葉をよく耳にする。Virtual Realityの略であり、CGなどで作られた人工の世界を、現実のように感じることができると言われる。2016年はVR元年とも言われ、医療や工業など多くの部門で、本格的な活用が始まった。今話題のVRも『応用数学研究部』の企画で体験できる。興味があるか、応用数学研究部は、プログラミングを主な活動として、理大祭では、部員が作った作品の展示を行っている。それらを実際に体験することができる。さまざまな作品があるが、その中でも注目の作品として、オセロアプリ、ポンパーマン風対戦ゲームの2つが挙げられる。オセロアプリのコンセプトは「負けオセロ」だ。負けに特化したAIが搭載され、一風変わったオセロを体験できる。これは色々なデバイスでプレイできるアプリで、実際にWindows Storeでリリースされるそう。チェックしてみよう。また、ポンパーマン風対戦ゲームは、「教授」の邪魔をくぐり抜け、いかに「単位」を獲得するかというゲームだ。理大祭期間中はインターネット上に公開される。スマートフォンでもプレイできる。他の人と対戦できるのが魅力だ。上のQRコードにアクセスするとプレイできる。ハイスコアや現在の対戦状況は、応用数学研究部のブースに行く確認できる。紹介した3つ以外にも色々な作品が展示されている。神楽坂キャンパス2号館2階221教室に是非足を運んでみてほしい。



▲対戦ゲームのQRコード

「この作品を学生だけでなく子どもや大人まで幅広い世代の人に見てもらいたい」と担当者は語った。本学での公演は11月20日(日)11時30分から14時30分、神楽坂キャンパス8号館4階841教室にて上演される。普段の生活で演劇と関わりが無い人も、学園祭という身近なイベントで演劇を楽しむことができるので、足を運んでみてほしい。

応用数学研究部

この頃、VRという言葉をよく耳にする。Virtual Realityの略であり、CGなどで作られた人工の世界を、現実のように感じることができると言われる。2016年はVR元年とも言われ、医療や工業など多くの部門で、本格的な活用が始まった。今話題のVRも『応用数学研究部』の企画で体験できる。興味があるか、応用数学研究部は、プログラミングを主な活動として、理大祭では、部員が作った作品の展示を行っている。それらを実際に体験することができる。さまざまな作品があるが、その中でも注目の作品として、オセロアプリ、ポンパーマン風対戦ゲームの2つが挙げられる。オセロアプリのコンセプトは「負けオセロ」だ。負けに特化したAIが搭載され、一風変わったオセロを体験できる。これは色々なデバイスでプレイできるアプリで、実際にWindows Storeでリリースされるそう。チェックしてみよう。また、ポンパーマン風対戦ゲームは、「教授」の邪魔をくぐり抜け、いかに「単位」を獲得するかというゲームだ。理大祭期間中はインターネット上に公開される。スマートフォンでもプレイできる。他の人と対戦できるのが魅力だ。上のQRコードにアクセスするとプレイできる。ハイスコアや現在の対戦状況は、応用数学研究部のブースに行く確認できる。紹介した3つ以外にも色々な作品が展示されている。神楽坂キャンパス2号館2階221教室に是非足を運んでみてほしい。

落語研究会

『落語研究会』は神楽坂キャンパス3号館3階333教室で寄席を開く。「若さを武器に、学生のできる範囲の『笑い』を詰め込む」をモットーに、メンバー一人一人が自慢の落語を披露する。落語の合間には、お笑いや大喜利なども行う。各自が今までの集大成として全力を出し切る心意気だ。落語研究会は、ステージを自分たちで作るなど理大祭へ向けての意識が非常に高い。また、落語の合間にも芸を披露したり、子どもにも楽しめるように考えたりと観客を喜ばせることに余念がない。これは、理大祭が今までの修行の成果を披露できる貴重な機会だからだ。落語を志す大学生にとってその道は険しい。師匠に弟子入りしていない大学生落語家が、正式な場に呼ばれることは少ない。大会に出ようにも開かれるのは半年に1回、それも岐阜まで赴かなければならない。学業やバイトで忙しい学生に厳しい制約である。落語研究会のメンバーも全員がこの大会に出られるわけではない。理大祭はメンバー全員が参加でき、ネタを見てもらえるため、自身の稽古の成果を試すことができる。客層が豊富なことも利点だという。どの層にどのようなネタを出せば笑いがとれるのか把握でき、より観客にあつたネタを出せるようになる。たくさん観客に来てもらい、それぞれのネタに対する反応が見たいという。中でも、落語をあまり聞いたことがない人の反応が貴重だ。初めて落語を聞いた観客でも笑えるネタならば、それはどこに出しても通用する。

一部 演劇部

『劇団羅摩駝(らむだ)』は東京理科大学1部演劇部である。東京家政大学演劇部の『劇団朱鷺(とき)』と合同で活動しており、通称『ラムトキ』と呼ばれている。定期公演は小劇場を借りて行っており、両大学の学園祭でも公演が行われている。ラムトキが初めて合同公演を行ったのは1981年と歴史は古い。今回、双方の学園祭での公演は「合格ラインがやってきた」という作品である。この作品のオーディションをした際の役者の雰囲気踏まえ、ファンタジー要素を取り入れた。その結果人間の心理を描いた前作品とは世界観が一転し、この作品が出来上がった。また公演で実際に使用する衣裳や看板を作っている。演出だけでなくオーディションや設営まで学生だけで行っている点も、劇団羅摩駝の魅力である。「合格ラインがやってきた」では、今までとは全く違ったアプローチを取り入れた新たな仕掛けをする。苦労する点も多いそうだが、本番に向けて着々と準備が進んでいる。新しい作品に取り組み際には、それぞれ価値観が違うので、役者同士でイメージのズレが生まれてしまう。しかし、話し合いや解釈を共にすることで、イメージがまとまった際には大きな喜びを感じるそう。



▲劇団の集合写真

新入部員募集中

TusPress

tuspress@gmail.com

